

芸術文化と創造的資質向上に関する実証的研究

2021 年度委託事業報告書

研究代表者 岡田猛 東京大学大学院教育学研究科教授

概要

現代は先行きが不透明で将来の予測が困難な VUCA 時代と呼ばれる。こうした時代背景の中で自ら新しいものを生み出したり、柔軟に問題解決したりする「創造性」が改めて重要視されている。多様な定義がなされてきた創造性の中でも、創造的成果を生み出すために重要な態度の一つとして、「創造的自己」が注目されている (Karwowski & Kaufman, 2017; 石黒・清水・清河, 2022)。創造的自己の発達的な変化は青年期後期に見られることが知られている (Karwowski, 2015)。本研究プロジェクトでは、この創造的自己に着目し、思春期から青年期にかけての創造的自己の発達過程を検討することを目的とした。また、創造的自己を高める活動として、芸術文化活動に焦点を当て、そうした活動が創造的自己の発達・促進にどのように寄与するかを検討することを目的とした。

2020 年度の研究では、創造的自己に関わる心理尺度の翻訳・開発を行った。2021 年度は、20～30 代の一般成人を対象とした調査に基づき、過去の様々な芸術経験が現在の美術・音楽との関りに及ぼす影響について検討した (研究 1)。また、青年期以降の一般成人を対象にした質問紙調査によって、青年期後期の創造的自己の変化を明らかにした。同時に、創造的自己を高める活動として過去・現在の創造活動に焦点を当て、芸術文化を含む創造活動が創造的自己と関係することを明らかにした (研究 2)。さらに、思春期の創造的自己がどのように発達するかを検討するため、中高生を対象とした質問紙調査を行った (研究 3)。また、芸術文化教育・実践などの介入が創造的資質に及ぼす影響を調べるための実践研究も行っている (研究 4)。

今回の調査では、中高生の創造的自己に関して、学年による著しい違いは見られなかったが、学校での芸術文化活動などの経験によっては変化が生じる可能性がある。今後は中高生を対象とする縦断調査を通して、部活動や習い事、芸術文化講座などの経験により創造的自己が高まるかどうかを明らかにする必要がある。

これらの研究は、現在国内外の学術誌への投稿に向けて、調査結果の分析・論文執筆の途上にある。本報告書では、研究 1・2 の大まかな調査結果を中心に報告する。

なお、この研究プロジェクトは、縣拓充氏 (千葉大学大学院国際学術研究院特任講師, 研究 1 主担当), 石黒千晶氏 (金沢工業大学情報フロンティア学部心理科学科講師, 研究 2 と 3 主担当), 東京大学大学院教育学研究科大学院生の松本一樹氏, 蓬田息吹氏, 藤本茉里恵氏が参加して実施している。

研究 1：成人期以降の芸術文化活動と創造的資質獲得の関係

児童期・青年期の芸術経験が将来の美術・音楽に関わる習慣に及ぼす影響

目的

多くの人にとって美術と音楽は、フォーマル、インフォーマルな環境を跨いで触れたり学んだりする機会の特に多い芸術領域である。本研究では、芸術文化活動の中でも美術と音楽に焦点を当て、児童期・青年期における様々な芸術経験が、成人した際の芸術文化に関わる習慣の形成にそれぞれの程度のインパクトを持つのかを、質問紙調査によって検討した。その際、「学校での授業や活動」「家庭の環境や習慣」「美術館・コンサートなど文化施設・イベントへの来訪経験」という 3 つの場面に着目した。

方法

研究参加者

2021 年 3 月に、インターネット調査会社を通して、都内在住の 20～30 代を対象に質問紙調査を実施した。20～30 代を対象にした理由としては、芸術に関わるワークショップや、学校と文化施設とが連携したプログラムが、この十数年で大きく広がったことが挙げられる。逆に言えば、40 代以上の場合は、児童・青年期にそれらのプログラムを体験した人数が限定されることが予想されたため、調査対象からは外した。また、ある程度美術館やコンサートにアクセスしやすい地域に居住している人々の芸術文化に関わる習慣を調べるため、都内在住者に限定した。

回答は 1,114 名から集まったが、回答の動機づけが疑われるものなどを除き、最終的に 919 名分のデータを用いた（男性 472 名、女性 447 名、年齢 $M=29.6$, $SD = 5.73$ ）。なお、回答者の出身地としては都内とその他が約半数ずつであった。

質問紙の構成

質問紙の中には、現在の芸術文化との関わり方や態度を問う項目群（美術館やコンサートへの来訪やワークショップ参加の頻度を尋ねる 4 項目、美術や音楽に関わる習慣を尋ねる 19 項目など）、過去の美術・音楽に関わる経験や環境を問う項目群（児童期・青年期における美術や音楽に関わる経験、習慣や家庭環境などを尋ねる 27 項目、習い事や部活動の経験の有無や年数を尋ねる 10 項目など）のほか、現在の居住地や出身地、自身及び両親の学歴等を尋ねる項目などを含めた。なお新型コロナウイルスの感染が拡大して以降、多くの人の美術館やコンサート等への来訪頻度は激減したと考えられたため、習慣を問う項目では、コロナ前の傾向を回答するよう求めた。

結果と考察

現在の来訪頻度

回答者の現在の美術館来訪頻度は、「2～3 ヶ月に 1 回以上」が 102 名（11%）,「半年に 1 回程度」が 113 名（12%）,「年に 1 回程度」が 172 名（19%）,「ほとんど／全く行かない」が 532 名（58%）という結果であった。同様に音楽ライブ・コンサートに関しては、「2～3 ヶ月に 1 回以上」が 132 名（14%）,「半年に 1 回程度」が 96 名（10%）,「年に 1 回程度」が 206 名（22%）,「ほとんど／全く行かない」が 485 名（53%）という割合であった。いずれも定期的に訪れる習慣を形成しているのは、約半数弱だと言える。

単相関

児童期・青年期における、学校、家庭、美術館／コンサート来訪経験に関わる項目群の回答と、現在の美術館／コンサート来訪頻度、および美術／音楽の表現の習慣それぞれの間の相関係数を表 1 に示す。なお、美術の表現の習慣に関しては、因子分析の結果をもとに、「水彩画やスケッチ、イラストや漫画などを含めて、絵を描くことはありますか」「日常生活の中で、絵を描いたり何か作品を作りたいと思うことはありますか」など 5 項目、音楽の表現の習慣に関しては、「自分で作曲をしたり、楽曲制作をすることはありますか」「日常生活や習い事の中で、楽器の演奏をすることはありますか」など 4 項目の得点を合計して算出した。

表 1 過去の芸術経験と現在の美術・音楽に関わる習慣との関係

	美術に関する習慣		音楽に関する習慣	
	美術館 来訪頻度	表現の 習慣	コンサート 来訪頻度	表現の 習慣
学校				
小学校の図工／音楽の授業は楽しかった	.156**	.269**	.177**	.268**
中学校の美術／音楽の授業は楽しかった	.233**	.422**	.204**	.305**
美術／音楽関連の部活・サークルの経験（年数）	.206**	.326**	.207**	.314**
家庭				
家に美術／音楽関連の書籍がたくさんあった	.312**	.418**	.206**	.397**
家に絵画や美術品／CD やレコードがたくさんあった	.306**	.392**	.229**	.265**
美術／音楽関連の習い事の経験（年数）	.214**	.271**	.168**	.190**
文化施設・イベント				
学校行事で美術館／コンサートに来訪（回数）	.346**	.287**	.298**	.222**
家族で美術館／コンサートに来訪（回数）	.383**	.332**	.361**	.306**
家族で美術／音楽関連の WS や講座に参加（回数）	.361**	.445**	.287**	.423**
統制				
年齢	-.055	-.082*	-.123**	-.118**
世帯年収	.108**	.024	.074	.051
最寄りの美術館への所要時間	-.191**	-.096**	-.110**	-.096**
自分の学歴	.165**	.004	.070	.024
父親の学歴	.196**	.116**	.094**	.097**
母親の学歴	.111**	.081*	.022	.072*

表 1 から分かる通り、美術・音楽に共通して、小・中学生時代の学校、家庭、美術館やコ

コンサートへの来訪経験のいずれもが、将来の芸術文化との関わりに有意に影響していた。特に現在の美術・音楽の表現の習慣に関しては、学校、家庭、文化施設・イベントの経験いずれにも、.4 程度の中程度の相関のある項目がみられた。他方で、美術館やコンサート来訪頻度には、学校での経験に比べて家庭での経験や実際に文化施設・イベント等に来訪した経験が強く影響していることが示唆された。

統制変数の中では、父親の学歴が、将来の芸術との関わりに影響を与えている可能性が示唆された。その他、世帯年収や自身の学歴は、美術館来訪頻度との相関のみ有意であった。

構造方程式モデリングによる検討

表 1 の相関係数は、相互にオーバーラップしており、疑似相関であるものも含まれていると言える。そこで、それぞれの固有の影響を検証するために、美術、音楽それぞれについて、図 1 のようにモデルを立てて検討を行った（現在も分析を継続中）。

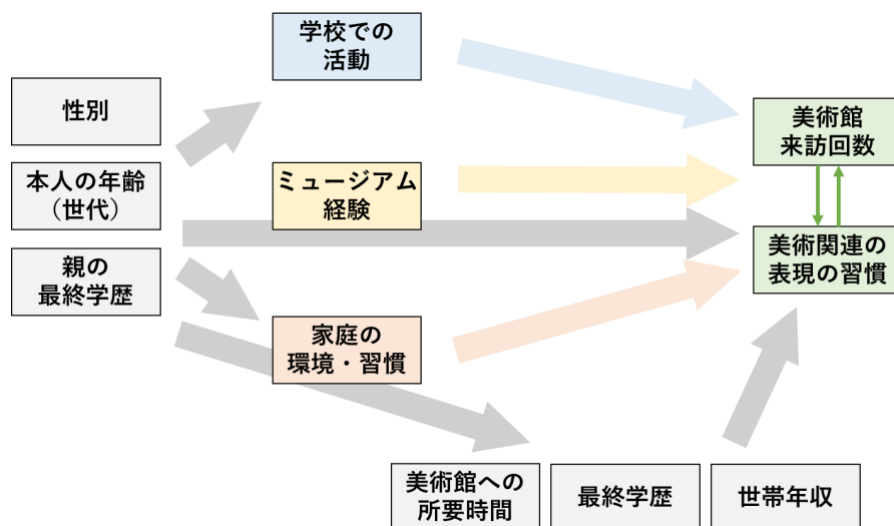


図 1 美術館来訪・美術表現の習慣に及ぼす影響の仮説モデル

分析の結果、小・中学校時代の要因は、現在の美術館やコンサートの来訪頻度の分散の 20%前後、表現に関する習慣に関しては 30%以上を説明できていた。すなわち、児童期・青年期の芸術に関わる経験は、10～20 年後にもある程度の影響力を持っていることが示唆された。

また、美術・音楽のどちらも、特定要因が突出して強く影響していることはなかった。例えば美術に関しては、学校行事での美術館来訪経験、家族との美術館来訪経験、ワークショップ参加経験、家庭環境、学校の授業など、それぞれの要素が固有の効果を持っていた。これらのことから、社会の中で、芸術文化に関わる多様な機会やプログラムが存在し

ていることの重要性が示唆されたと言える。また、20-30 代に限っても、若い世代ほど美術館やコンサートへの来訪経験は多い傾向があり、文化芸術に関わるプログラムが年々拡大していることも推察された。

ただし、美術館やコンサート来訪頻度に対しては、家庭環境の要因、美術館・コンサート来訪経験からの影響に比べ、学校の授業の影響力は相対的に大きくなかった。これらのことから、学校教育における芸術教育と、生涯学習としての芸術文化との接続という部分では、不十分であることも示唆される。

最後に、本調査の課題として、あくまで 1 時点の調査による予測であり、回顧的な質問項目では過去の記憶が改変された可能性などもあるため、厳密な因果関係が示されたわけではないこと、文化施設・イベントは来訪回数しか見ておらず参加したプログラムや体験の中身は未検討であること、中学卒業後の 10-20 年間の文化芸術との関わりを検証できていないこと、などが挙げられる。

※この研究は日本教育工学会 2022 年春季全国大会にて発表を行い、現在論文執筆中である。

研究 2：成人期以降の芸術文化活動と創造的資質獲得の関係

目的

創造性を発揮する上では、創造的潜在能力があるだけでは不十分であり、自らの創造性に関する自信や創造性を重視する態度が重要であることが明らかになっている (Karwowski & Beghetto, 2019)。本研究では、創造性に関する態度として創造的自己に着目し、芸術文化活動と創造的自己の関係を検討した。特に、20 代から 60 代までの一般成人を対象として、現在・過去の芸術文化活動との関わりと創造的自己の関係をオンライン調査によって明らかにした。

方法

研究参加者 オンライン調査会社を通じて、20 代~60 代の一般成人 700 名（男性 350 名、女性 350 名、年齢 $M=44.79$, $SD=13.72$ ）を対象に質問紙調査を実施した。なお、回答前には本調査への回答は任意であること、本調査の目的や個人情報の保護などについての説明を記載し、それらに同意した場合のみ回答するように教示した。本研究は東京大学倫理審査委員会によって承認を受けていた。

得られた回答のうち、(a)複数の因子を含む心理尺度のすべての項目に同じ回答をしている回答者 176 名、(b)逆転項目に反応していない参加者 45 名、合計 221 名を除外し、最終的なデータセットは $N=479$ （男性 232 名、女性 247 名、年齢 $M=45.29$, $SD=13.91$ ）と

した。

質問紙の構成 質問紙は以下の心理尺度、および質問から構成されていた。調査では他にも質問を設けていたが、別の研究で扱われたものはここでは報告しない。

- 1, 日本語版創造的自己尺度(SSCS-J; Ishiguro et al., 2022) 創造的資質を測定するため、創造的自己を尋ねる 11 項目からなる心理尺度に 7 件法で回答してもらった。
- 2, 創造的達成尺度(Creative Achievement Questionnaire; Carson, Peterson, & Higgins, 2005) 文化活動を含む、過去の創造活動での達成経験を測定する、創造的達成尺度を用いた。
- 3, 現在の芸術経験についての質問 参加者の現在の創造活動を尋ねた。ここでいう「創造的活動」とは、創造性を発揮する活動全般を指す。参加者は以下の 15 の選択肢 ((a) 美術, (b) 音楽, (c) ダンス, (d) 個人スポーツ, (e) チームスポーツ, (f) 建築設計, (g) 起業, (h) 執筆, (i) ユーモア, (j) 発明, (k) 科学, (l) 演劇・映画, (m) 料理, (n) その他, (o) なし)の中から、趣味や仕事として取り組んだことのある創作活動を選択した。複数の活動をしている回答者には、「次のうち、最も力を入れて取り組んだ創作活動はどれですか」と質問し、(a)～(n)の選択肢から 1 つだけ選んでもらった。次に、「その創作活動を始めてどのくらいになりますか」という質問に対して、(a) 2 年未満, (b) 2～4 年, (c) 4～6 年, (d) 6～8 年, (e) 8 年以上から選択してもらった。最後に、「これらの創作活動をどのくらいの頻度で行っていますか」という質問に対して、(a) ほとんど行っていない, (b) 年に数回, (c) 月に数回, (d) 週に数回, (e) ほとんど毎日, の中から回答してもらった。

結果と考察

まず、年代ごとの創造的自己の違いを検討した。20 代, 30 代, 40 代, 50 代, 60 代それぞれの年代ごとの創造的自己得点を算出し、年代ごとの違いについて 1 要因被験者間分散分析を行った。その結果、年代によって創造的自己得点には違いが見られなかった($F(4,474) = 1.84, p = 0.12$; 図 2)。ただし、年齢と創造的自己との間には有意だが弱い正の相関がみられた($r = .10, p < .01$)。その他のデモグラフィック変数として、学歴や年収も創造的自己と有意な正の相関がみられた(学歴: $r = .16, p < .01$; 年収: $r = .20, p < .01$)。

次に、過去の創造的達成経験と創造的自己の関係を検討した。相関分析の結果、過去の創造的達成と創造的自己は有意だが弱い正の相関がみられた($r = .23, p < .01$; 図 3)。また、現在の創造活動経験の期間と頻度との関係を検討したところ、創造活動の期間は創造的自己と有意だが弱い正の相関がみられた($r = .16, p < .01$)ものの、頻度は有意な相関がみられなかった。

以上の結果から、一般成人の創造的自己は年齢を重ねるにつれて高まることが示唆された。なお、デモグラフィックな変数の中では年齢以外にも学歴や年収との弱い正の相関も見られた。文化活動も含む創造活動については、過去の創造的達成は創造的自己と有意な正の相関がみられた。すなわち、創造的達成が多い人ほど、創造的自己得点が高かった。また、

現在の創造活動の継続期間と創造的自己の間に有意な正の相関がみられた。現在行っている創造活動の継続期間が長い人ほど、創造的自己が高いこれらの結果から、創造活動を継続し、創造的達成を重ねた人の方が創造的自己は高いことがわかった。

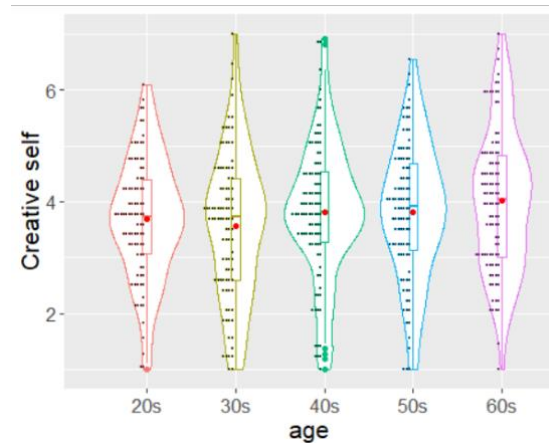


図 2 年代ごとの創造的自己

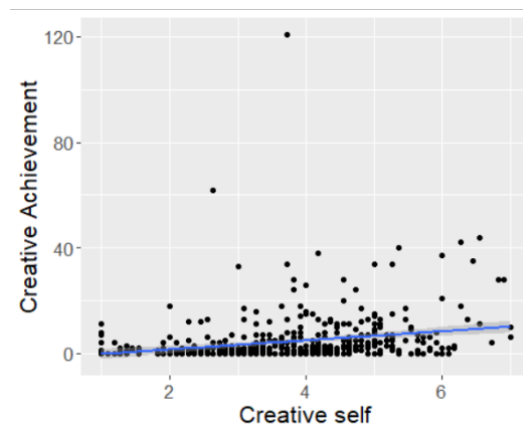


図 3 創造的達成と創造的自己の関係

※これらの結果は以下の論文に詳述されている。

Ishiguro, C., Matsumoto, K., Agata, T., & Okada, T. (2022). Development of the Japanese Version of the Short Scale of Creative Self 1, 2. *Japanese Psychological Research*.

研究 3：中高生の創造的資質獲得過程の検討

目的

中高生が創造的自己をどのように発達させるのかを検討する。

方法

研究参加者 都内の協力校に調査を依頼し、中高生の創造的自己や文化活動に関する質問紙調査を行った。調査は 2021 年の夏(7 月～10 月末)に実施した。参加者は 610 名(男性 275 名, 女性 275 名, その他 9 名; 年齢 $M=14.83$, $SD=1.79$) であった。なお, 回答前には本調査への回答は任意であること, 本調査の目的や個人情報の保護などについての説明を記載し, 「研究参加に同意していただけますか」という質問に対して「はい」と回答した場合のみデータ分析の対象とした。本研究は東京大学倫理審査委員会によって承認を受けていた。

質問紙の構成 中高生の創造的自己の発達を明らかにするため, 創造的資質を測定するための 11 項目からなる心理尺度である日本語版創造的自己尺度(SSCS-J; Ishiguro et al., 2022)に 5 件法で回答するよう求めた。

結果と考察

学年ごとの創造的自己の違いを検討するため, 1 要因被験者間分散分析を行った。その結果, 学年による創造的自己得点の違いは見られなかった($F(5,584) = 0.93$, $p = 0.45$; 図 4)。以上の結果から, 中高生の期間においては創造的自己の年齢による発達の变化は見られない可能性が示唆された。海外では青年期において創造的自己に大きな変化が見られることが知られているが(Karwowski, 2015)、日本の中高生ではそうした変化が見られなかった。今後の研究では, 高校生から大学生の変化についても検討する必要があるかもしれない。

研究 2 の調査 2 において創造活動と創造的自己の間には正の相関が見られたことから, 創造活動を重ねることにより創造的自己が育まれる可能性があると考えられる。そのため, 今後は部活動や習い事, 芸術体験講座が中高生の創造的自己に与える影響を縦断的に検討することを予定している。この研究結果は本年度の日本心理学会大会で発表予定である。

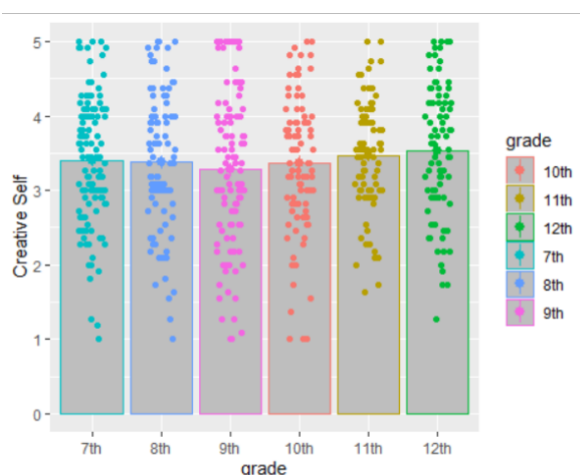


図 4 中高生の学年ごとの創造的自己

研究 4：芸術文化教育・実践などの介入が創造的資質に及ぼす影響

研究②と同じ協力校で中高生を対象にして、創造的資質を高めることを目的とした『創造性開発のための芸術体験講座』を実施した。具体的には、中島裕介氏（歌人）による短歌の創作に関する講演や仁科勝介氏（写真家）による写真創作のワークショップ（WS）等を実施した。これらの講演会 WS 等に加えて、別枠で行っているアートクロスロードプロジェクトの WS も合わせて、芸術体験講座の効果を明らかにする。これらの講座への参加の有無、参加の仕方が創造的資質にどのような影響を与えるかについては現在分析中である。